

Hokkaido University News

北大時報

令和4年

5

No. 818 May 2022

北海道大学が「THEインパクトランキング2022」で総合ランキング
世界10位（国内1位）, 「SDG2 飢餓」の項目で世界1位にランクイン
春の叙勲に本学から5氏
鈴木貴子外務副大臣が来学



Hokkaido University
RANKED 10th

THE IMPACT
RANKINGS 2022

www.thewur.com



株式会社バッファロー様からのパソコン用充電器の寄贈に対し感謝状を贈呈



鈴木貴子外務副大臣が来学

全学ニュース

- 1 北海道大学が「THEインパクトランキング2022」で総合ランキング世界10位（国内1位）、「SDG2 飢餓」の項目で世界1位にランクイン
- 2 春の叙勲に本学から5氏
- 8 株式会社バッファローからのパソコン用充電器の寄贈に対し感謝状を贈呈
- 9 インターンシップで始める就活準備ガイダンスを開催～令和4年度キャリアセンター就職ガイダンスがスタート～
- 10 2021年度春季国際インターンシップ全学成果報告会を開催
- 11 寶金総長が北京科技大学創立70周年記念学長フォーラムにオンライン出席
- 11 鈴木貴子外務副大臣が来学
- 12 令和4年度第1回 定例記者会見を開催
- 13 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 札幌創成高校へ向けて2名の研究者が講義を実施
- 15 北大フロンティア基金
- 17 北大コアファシリティ構想研究支援人材育成プログラム マルチスキル人材育成プロジェクト 令和3年度第2回 部局・分野横断技術交流会「光学顕微鏡の観察の新展開：光学分解能を超える観察とリモート観察」を開催
- 18 きたキッチンオーロラタウン店で「北海道大学フェア」を開催
- 19 北大×サントリー 鏡月Greenマーケティング施策考案プロジェクトを実施
- 20 株式会社HBAとの北海道フードロス削減プロジェクトを実施
- 21 第16回サステイナブルキャンパスマネジメント本部 ステークホルダー座談会を開催

部局ニュース

- 22 2022年度北海道大学スマート物質科学を拓くアンビシャスプログラム第2期生採用式を開催
- 23 理学部生物科学科（高分子機能学）「ハイフレックス授業」FDを開催
- 23 先端生命科学研究院FD「特許出願を意識した審査会」を開催
- 24 水産学部附属練習船「うしお丸」代船 命名・進水式を挙行～新船を「うしお丸」と命名～
- 25 人獣共通感染症国際共同研究所が人獣共通感染症研究拠点研究シンポジウムをオンラインで開催
- 26 ポーランドの東方研究センターとの緊急共催セミナーを開催 War in Ukraine and beyond: Polish and Japanese Perspectives and Recommendations
- 27 観光学高等研究センターとひがし北海道自然美への道DMOが連携協定を締結
- 27 脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙行

表敬訪問 28

人事 29

訃報

- 30 教授 濱田 靖弘 氏
- 30 名誉教授 望月 恒子 氏
- 31 名誉教授 小田島 晟 氏
- 31 名誉教授 七戸 長生 氏
- 32 名誉教授 繪面 良男 氏
- 32 名誉教授 富田 喜内 氏



北大×サントリー 鏡月Greenマーケティング施策考案プロジェクトを実施



株式会社HBAとの北海道フードロス削減プロジェクトを実施



観光学高等研究センターとひがし北海道自然美への道DMOが連携協定を締結



脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙行

■全学ニュース

北海道大学が「THEインパクトランキング2022」で総合ランキング世界10位（国内1位）、「SDG2 飢餓」の項目で世界1位にランクイン

イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education」は、「THEインパクトランキング2022」を4月28日（木）に発表し、本学は総合ランキングの対象となった世界1406大学中、日本初の世界10位（国内1位）にランクインしました。

総合ランキングは各大学のSDGs別に算出されたスコアのうち、必須であるSDG17のスコアと、残りSDG1～SDG16のうち上位3つのSDGsのスコアの合計で順位が決まります。また、SDG目標別ランキングにおいては、17のSDG目標のうち、「SDG2 飢餓」（世界1位）、「SDG17 パートナリーシップ」（同12位）、「SDG14 海洋資源」（同17位）、「SDG15 陸上資源」（同18位）、「SDG9 産業と技術革新」（同43位）、「SDG16 平和と公正」（同61位）、「SDG6 安全な水とトイレ」（同92位）が世界100位以内にランクインし、高い評価を得ました。

本結果を受け、本学は同日に記者会見を開催し、寶金総長、吉見 宏理事・副学長、横田 篤理事・副学長及び阿部 弘副理事が参加して報道関係者向けに本学の取組や今後の展望について語りました。

寶金清博総長のコメント：

今回の結果は、本学の長年にわたるSDGs達成へ向けた取組みが評価されたものと考えており、大変嬉しく思います。本学は1876年設立の札幌農学校を前身としており、食料生産やフィールドサイエンス、環境科学に強みを持っています。より具体的なサステナビリティへの取組みとしては、1996年に国立大学で初めて「キャンパスマスタープラン」を策定したことに始まり、昨年の「サステナビリティ推進機構」の設置に至るまで、数多くの先進的な取組みを行ってまいりました。本学では今後も、次世代に持続

可能な社会を残すための取組みを一層進めてまいります。

詳細はこちら：

<https://www.hokudai.ac.jp/news/2022/04/THERanking2022.html>

THEインパクトランキング2022とは：

イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education（THE：ティー・エイチ・イー）」による「THEインパクトランキング」のことで、気候変動に対する活動やジェンダーの平等、健康と福祉など、大学の社会貢献の取組みを国連のSDGsの枠組みを使って評価するというものです。今回で4回目となるこのランキングに、本年度は世界1,524大学、日本からは84大学が参加しました。

（社会共創部広報課）



記者会見の様子



記者からの質問に答える寶金総長



記者からの質問に答える横田理事・副学長



当日の参加者

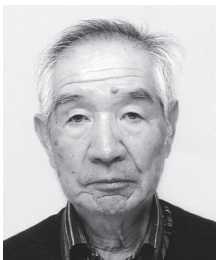
春の叙勲に本学から5氏

この度、本学関係者の次の5氏が、令和4年春の叙勲を受けることについて、4月29日（木）に発表となりました。

勲章	経歴	氏名
瑞宝中綬章	北海道大学名誉教授	小平 紘平
瑞宝中綬章	北海道大学名誉教授	烏野 慶一
瑞宝中綬章	北海道大学名誉教授	大場 良次
瑞宝双光章	元 北海道大学病院医療技術部長	澁谷 斉
瑞宝単光章	元 北海道大学病院看護部看護師長	下河原 みゆき

各氏の長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し、授与されたものです。各氏の受章にあたっての感想、功績等を紹介します。

(社会共創部広報課)



こざいら こうへい
小平 紘平 氏

感想

この度、令和4年春の叙勲の栄を賜りましたこと、ここに謹んで報告いたします。

思えば、北海道大学に赴任しましたのは昭和46年4月のことで、北海道での生活は初めてなうえ、当時は大学紛争もあり、戸惑いながらの北海道大学での生活が始まりました。

北大は広大なキャンパスを有し、四季の変化に富んだ原生林を今なお残しております。早春には「オオバナノエンレイソウ」をはじめ数多くの花が咲き、これらの花の観察に原生林を散策するのを恒例としていた私にとって、心休まる風情でありました。また、このような環境は、学生の教育にとっても、この上ない場であると信じております。

私は「機能性酸化物単結晶の育成」を主テーマに結晶工学の立場から研究教育に携わってきました。これらは、無機結晶材料の合成に高圧力を応用して優れた性質を有する材料を得ること、および大型単結晶の経済的育成技術を確認することにあります。

そのために、酸化物の焼結に固体圧および熱間静水圧を適用し、原料などの調整条件などを詳細に検討して透明焼体などを得ております。とくに、熱間静水圧焼結では、高温で良好な圧力媒体となるガラスを使用し、緻密な焼結体を得られることを実証しています。

また、経済的な大型単結晶の融液育成に対して、新しい育成技術である連続引き下げ法を確立しました。この方法では、目的とする結晶の直径が貴金属容器の大きさと同程度であることが最大の利点となっております。

教育面で、学部においては無機化学および無機工業材料など、大学院においては無機化学特論、無機工業材料特論などの講義、演習などを担当して参りました。

以上のように、昭和46年4月から平成16年3月までの33年間、多くの方々の支えのおかげで、充実した研究教育活動を行うことができました。

最後になりますが、この度、令和4年春の叙勲の栄を賜りましたことは身に余る光栄であります。これもひとえに長年に亘る諸先生のご指導ご鞭撻、先輩、同僚、研究室のスタッフ、学生諸氏など様々な方々のご支援の賜物と感謝し、心から厚くお礼申し上げますと共に、これまでお世話になりました北海道大学が益々発展されることを願ってやみません。

功績等

小平紘平氏は、昭和46年4月に北海道大学工学部助手に採用され、同47年9月同博士後期課程を修了し、「Pressure Sintering of Beryllium Oxide」によって理学博士の学位を授与されました。同62年6月には北海道大学工学部教授に昇任し、応用化学科応用化学第5講座を担当され、平成9年4月には北海道大学大学院工学研究科教授に配置換えになりました。平成16年3月31日限り定年により退官されるまで、学生の教育と同専攻及び学科の発展に尽くされました。

研究面では、無機材料の合成や新しい結晶育成法の確立など無機結晶材料の分野で多方面の研究に従事しましたが、とくに高圧力を応用して優れた性質を有する無機結晶材料を得ていること、及び酸化物大型単結晶の経済的な融液成長技術の確立に取り組みられ多くの業績を挙げられています。

新しい無機材料の合成に高圧力を応用した研究では、酸化物の焼結に固体圧及び熱間静水圧を適用し、そのための原料の調製条件などを詳細に検討してBeO、MgAl₂O₄などの透明焼結体を得ています。とくに熱間静水圧焼結では、高温で良好な圧力媒体であるガラスセルの使用を提案し、この方法は緻密な焼結体を得るための有効な手段であることを実証しています。

酸化物大型単結晶の融液成長に関しては、その経済的な作製を目的に、新しい結晶育成技術である引き下げ法を確立しています。この方法では、高価な貴金属製容器の直径が目的とする結晶の直径と同程で充分であるとともに高さもほとんど必要ないことが最大の利点となっています。

このように無機材料化学および無機合成化学の分野で独創的な研究を行い、この分野の発展に多大な貢献をされ、その業績に対して、平成22年6月に日本セラミックス協会より功労賞を贈賞されました。

教育面では、昭和46年以降の教官在任中、学部においては、無機化学、無機工業材料、応用無機構造化学、無機材料化学、応用化学学生実験など、また大学院工学研究科においては、無機化学特論、無機材料化学特論、無機材料化学特論ゼミナール、機能材料化学特別演習、機能材料化学特別研究第一、同第二などの講義、演習を担当されるとともに、学部学生並びに大学院学生の研究指導にあたられ、多くの技術者や研究者の育成に貢献されました。その間、学外においても多数の大学の非常勤講師を併任して本学以外の学生の教育にも尽力されました。

以上、学生の教育、学術研究の発展、本学の運営などに対する貢献は極めて大なるものがあります。

略 歴

生年月日 昭和16年3月30日
 昭和39年4月 } 日本揮発油株式会社
 41年4月 }
 46年4月 北海道大学工学部助手
 47年4月 北海道大学工学部講師
 48年4月 北海道大学工学部助教授
 62年6月 北海道大学工学部教授
 平成6年4月 } 北海道大学工学部応用化学科長
 7年3月 }
 14年4月 } 北海道大学工学部応用化学科長
 15年3月 }
 16年3月 北海道大学定年退職
 16年4月 北海道大学名誉教授

(工学院・工学研究院・工学部)



からすの けいいち
 烏野 慶一 氏

感 想

物覚えが悪く、頭脳明晰でもなく、世間一般の常識に疎いと思っ
 ている。そんな私に勲章を下さる
 お話を頂いて戸惑いながら、厚か

ましくお受け致しました。

私には飛びぬけて優れた業績がある訳でもなく、誇れるものは有りませんが、この勲章を頂けることになったのは好きな仕事に巡り合って、それにのめり込み、何時もそれを支えて下さる人との出会いがあったことだと思います。恩師や先輩、良い仕事仲間（同僚、友人、優秀な学生諸氏）に恵まれ、皆様のおかげで充実した日々を送らせていただきました。

大学院を出て、初めての勤務先である神戸商船大学では自由に好きな研究をさせていただきながら、学生達と共に体力づくり、冬は六甲登山とスキー、夏は遠泳や帆走の短艇で瀬戸内海巡り、また航海訓練所練習船の遠洋航海に員外航海士で乗船させていただき、そこでの体験は国内外の色々な人々と出会って人と人の付き合いを学び、共同作業のノウハウを教わりました。

昭和57年には高校生時代に憧れていた北海道大学に転勤赴任、学生気分のまま研究室に入った以前の勤め先とは勝手が違い、右往左往して落ち込み迷ったときもありましたが、ここでも良い恩師と仲間恵まれて同僚との共同研究で、院生時代に経験した船舶操縦性流体力研究に再び取り組む事ができました。超大型商船から小型漁船への転向です。色々な方々のご支援があって、これが私のメインテーマとなりました。北大水産学部でも夏には七重浜での遠泳と短艇実習や臼尻漁港での定置網実習の体験学習があり、諸先生方や漁業者の方々との交流で商船大とはまた違った多くの事を教わりました。

そして初めての経験で北大水産学部研究調査船“うしお丸”代船建造に携わらせていただき、乗組員や関係者の方々に色々な実務を教わり、そして竣工の際には皆さんと喜びを共にしたあの感動は忘れられません。

一方、地元では函館地方海難審判庁での参審員として漁船漁業の実態を教わり、漁網制作会社とは漁労作業中の人命の危険を孕む漁網巻き揚げウインチの音声認識コントローラ開発などで地元漁業関係者に多大なご協力をいただきました。残念ながら実用化には至りませんでした。

急速な科学技術の進歩に錆ついた私の頭はついていきませんが、先の見通せない不安な状況の中でも、頭の柔らかい優秀な皆さん方が英知を出し合ってよりよい社会を築いてくださる事を願っております。

終わりにりましたが、今までご支援いただきました大学の教職員の方々、周囲の皆様方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

功績等

鳥野慶一氏は、昭和39年3月大阪府立大学工学部船舶工学科を卒業後、大阪大学大学院工学研究科造船学専攻修士課程及び同大学大学院工学研究科博士課程を経て、昭和44年4月神戸商船大学商船学部助手に採用されて以来、同大学助教授、北海道大学水産学部助教授及び教授を歴任され、平成16年3月に定年退官されるまで、造船学・船舶工学の教育、研究に務められました。

研究面では、漁船の運動性能の向上、漁船の運動の数学モデル化、次世代新型漁船の設計開発、船体模型による水槽試験手法の開発、コンピュータ計算流体力学、解析流体力学を中心として、特に、航走する船舶の船体に働く流体力の解析に務められました。この結果、同氏が提唱する数学モデルは造船界においても高く評価され、同氏の論文「低速時における主船体操縦性流体力の新しい数学モデルの研究」は、平成元年1月に関西造船協会賞を受賞されています。以降、このモデルは、“北大モデル”または“鳥野モデル”として知られ、多くの研究者から参照されるものとなりました。その後もモデルのさらなる改良やそれを用いた応用研究を精力的に継続し、造船所において実船の運動制御システムや操船シミュレータの開発に採用されるなど、産業界において実用に供されるに至っています。

また、学会活動にも積極的に関わられ、日本航海学会においては評議員、学会賞選考委員、論文審査委員を歴任されたほか、日本造船学会内では試験水槽委員会の委員を長年務め、船舶操縦運動の数学モデルの確立に大きく寄与し、この数学モデルの基本概念は、世界の造船学をリードする日本において標準となり、同氏は本委員会の委員としてこの研究活動に多大な貢献をされました。その他にも、函館地方海難審判庁の参審員として、北海道、東北地方での漁船海難事故の原因解明を行い、水産業界・漁業界に対して事故の防止に向けた漁船の運用面からの実用的な提言と助言を行うほか、社団法人日本海難防止協会の調査検討委員会委員、社団法人日本造船研究協会研究部会の委員、社団法人漁船協会技術委員会の委員、社団法人漁船機関技術協会検討会の委員、函館地区スーパーマリン開発協同組合開発検討委員会委員を歴任し、社会的、地域的な活動を通して、大きな貢献をされました。

以上のように同氏は、長年にわたって学術の振興、教育の推進、人材の養成、地域の振興に多大な貢献をなし、その功績は、誠に顕著であります。

略歴

生年月日	昭和16年1月29日
昭和44年4月	神戸商船大学助手
48年4月	神戸商船大学助教授
57年4月	北海道大学助教授
60年4月	北海道大学教授
平成16年3月	北海道大学定年退職
16年4月	北海道大学名誉教授

(水産科学研究院)



おおば りょうじ
大場 良次 氏

感想

この度の春の叙勲に際し、北海道大学からのご推挙により瑞宝中綬章受章の栄に浴しましたことは、私にとりまして身に余る荣誉であり喜びに堪えません。叙勲に対してご助力頂いた関係各位に深く感謝申し上げます。

顧みますと昭和45年春、博士課程を修了して学位を頂き、直ちに本学工学部の新設間もない応用物理学科に赴任して以来平成17年の定年退職まで、35年の長きに亘り多くの良き諸先輩、同僚、学生に恵まれて、教育と研究の活動に従事することが出来ましたことは、私にとり誠に幸いです。

赴任当初の北大は、その数年前に始まった大学紛争が最盛期を過ぎて終末期に当たり、学内は騒然として居りました。工学部校舎は学生により封鎖され、教員は校舎内に立ち入りすることが出来ず、学内外を転々と会場を変えながら連日のように開かれる紛争対策のための教授会に忙殺され、私も研究は勿論教育も殆ど出来ないような時間を過ごすことになりました。工学部の本館（A棟）は建設途中で、旧本館（白亜館）の一部もまだ残されておりました。本館二階に頂いた私の居室の窓には屋上から吊下された投石防止用の金網が掛けておりました。大変な処に来てしまったなというのが最初の印象でした。

間もなく大学紛争が終息し教育と研究が始まると、本学の恵まれた自然環境と才気あふれ大らかな学生達とを実感することになりました。設立間もない応用物理学科と言う事もあり、研究機器や予算その他の研究環境はとても充分なものとは言えませんでした。しかし私の専攻とする計測工学にはさほど高価な研究機器を要しない研究テーマもあり、先ずはそのようなテーマについて、学生達と年齢も近かったこともあり、一緒に楽しく研究を進めることが出来たことは幸いです。結果的に以後の私の研究テーマが殆ど独りよがりの新規の基本的アイデアについて、学生と一緒に追及して行くことが中心になったように思います。

私の35年の北海道大学在職期間を通じて何がしかの研究成果が得られたとすれば、それらの多くは上述のような学生との共同作業により得られたものです。今回の受章の一因がそのような成果にもあるとすれば、この荣誉は本学においてご厚誼頂いた諸先輩・同僚からのご助力に加えて、殆ど独りよがりの私の研究テーマに付き合っ一緒に汗を流してくれた多くの学生諸君の協力の賜物と、この場をお借りして厚く御礼申し上げる次第です。

功績等

大場良次氏は、昭和45年4月から北海道大学工学部に講師として採用され、翌46年4月には同助教授に昇任されました。昭和63年4月には同教授に昇任されて、応用物理学

科応用計測学講座を担任されました。平成9年4月には北海道大学大学院工学研究科教授に配置換えとなり、平成17年3月31日限り定年により退官されるまで、学生の教育と同専攻及び学科の発展に尽くされました。

教育面では、本学工学部応用物理学科において、電子物理学第一、計測回路第一、同第二、先端計測技術、電子工学、応用電子工学等を、大学院工学研究科応用物理学専攻及び量子理工学専攻において、応用計測学M、応用計測学特論、物理情報処理特論、計測情報処理特論等を、それぞれ講じられました。また、応用計測学講座及び計測情報論分野における直接の研究指導により、学部、大学院修士課程、同博士課程を通じて、外国人留学生を含む約200名の研究者・技術者を育成されました。

研究面では、計測工学、就中、計測情報処理、センサ工学、及び光学計測を中心に精力的に活動され、多くの優れた業績を挙げられています。特に、信号処理技術を応用して、機械装置の発する異常音を圧倒的な騒音中から分離抽出する、「逆フィルターによる異常信号分離抽出技術」を開発されています。特許化されたこの技術は平成11年の注目発明に選定され、科学技術庁長官から科学技術庁注目発明選定証を授与されています。さらに、この特許を民間企業に実施許諾することにより、大学の技術シーズを民間に移転して、「機械装置の音響異常診断」という全く新しい技術分野を創出されています。業績の一部である氏の編著書「インテリジェント・センサ技術」は、ジョン・ワイリー出版から同社のインテリジェントセンサシリーズの第一巻として翻訳出版されており、知能化センサに関する入門書として世界的な評価を受けています。

一方氏は、知的所有権の重要性を夙に認識され、研究成果の中でも産業面から特に重要なものの特許化に早くから務められており、外国特許14件を含む、20件の特許権を成立させています。

これらの業績により、平成4年には英国物理学会から、平成13年には計測自動制御学会からそれぞれフェローに選定されています。

以上、学生の教育、学術研究の発展、本学の運営並びに専門学会の運営、及び、特に新技術分野「機械装置の音響異常診断」の創出による産業界への貢献は、極めて大なるものがあります。

略歴

生年月日	昭和17年3月8日
昭和45年4月	北海道大学工学部講師
46年4月	北海道大学工学部助教授
60年8月	ドイツ連邦共和国ベルリン工科大学在外研究員 及び英国マンチェスター大学在外研究員
61年6月	
63年4月	北海道大学工学部教授
平成9年4月	北海道大学工学部応用物理学科長
10年3月	
17年3月	北海道大学定年退職
17年4月	北海道大学名誉教授
17年4月	株式会社山武技術顧問
20年9月	

20年10月 } アズビル株式会社技術顧問
23年3月 }
(株式会社山武は、平成20年10月1日にアズビル株式会社に名称変更)

(工学院・工学研究院・工学部)



澁谷 ひとし 氏

感想

このたび、令和4年度の春の叙勲におきまして、瑞宝双光章という栄誉ある素晴らしい章を受章する事が出来ました事に、私自身心より感激しております。これもひとえに北海道大学及び北海道大学病院の諸先輩や同僚の皆様のご指導とご支援の賜と深く感謝申し上げる次第でございます。

私は、昭和58年に北海道大学医学部附属病院検査部（現 北海道大学病院検査・輸血部）に入職し、以来退職する令和3年まで38年間にわたり細菌検査、生化学検査、免疫血清検査、遺伝子検査、一般検査及び緊急検査などの臨床検査業務や医療情報システム管理などの医療情報関連業務、人事労務管理をはじめとした医療技術部業務など診療支援業務、そして同僚や他部署・診療科と共同で取り組んだ様々な研究分野、また、臨床検査技師養成のための学生実習などの教育分野に前向きに取り組んできました。このように大学病院の3本柱である診療、教育、研究の領域に幅広く関与してきたことが、現在の自分の成長につながり、その結果として周囲の方々に客観的に評価されたことが、この様な素晴らしい叙勲受章に結びついたものと考えます。

北海道大学病院は、昨年の令和3年で創設100周年を迎えましたが、そのうちの4割近い38年間にわたり、北海道大学病院の発展に寄与できたことも名誉なことと感じております。自分が就職した当時は、北13条門から入構しても現在のような素晴らしい銀杏並木ではありませんでしたが、出勤時にその北13条門から入り病院玄関に行く途中では、春は新緑の中の桜、夏は深緑、秋は紅葉、冬は白銀の北大構内の様々な景色が今でも脳裏に焼き付いており、そのような素晴らしい環境で仕事ができたと誇りに思っております。また、さらに遡りますと昭和55年からの3年間、北海道大学医学部附属臨床検査技師学校（現 北海道大学医学部保健学科検査技術科学専攻）で学んでおりましたので、学生時代からの通算41年間にわたって自分を育てていただいた北海道大学及び北海道大学病院に感謝するとともに本当に幸せなことであったと改めて感じました。

これからは、この受章を励みに今後も自分を育てていただいた皆様方に少しでも恩返しをする事が出来るよう、より一層精進してまいりたいと思います。現在は、日本医療

大学の教員として、後進となる臨床検査技師養成のための教育を行っている立場でもあり、この受章を機にさらに社会貢献出来るよう頑張っていきたいと思っております。最後にはなりますが、北海道大学及び北海道大学病院のご発展をこころよりご祈念申し上げます。

功績等

澁谷齊氏は、昭和36年9月17日に北海道白糠郡白糠町に生まれ、同58年3月に北海道大学医学部附属臨床検査技師学校を卒業、北海道大学医学部附属病院臨床検査技師、主任臨床検査技師、副臨床検査技師長及び北海道大学病院臨床検査技師長を経て北海道大学病院医療技術部長に就任され、令和3年3月に北海道大学病院を退職されるまで北海道大学病院の臨床検査関連を主体とした診療支援業務に努め、同3年4月に日本医療大学の講師になられ今日に至っています。

同氏は、北海道大学医学部附属病院検査部に入職した昭和58年より細菌検査を担当し、当時はまだ国内での検出例がほとんどなかった偽膜性大腸炎の原因菌であるクロストリジウム・デフィシル菌や十二指腸潰瘍などの原因菌であるピロリ菌の検査法を確立するとともに、各種学会で発表されました。また、分析装置の結果の取り込みをオンライン化した細菌検査室情報システムを構築されました。

その後、生化学検査室では、脂質代謝に関わるLP(a)の分子量解析や間質性肺炎の診断マーカーであるKL-6の研究により、共同研究者とともに学術論文を国際誌に発表されました。

平成6年から医療情報部に兼務し、病院情報システムの管理と並行し、次世代病院情報システム調達のための仕様策定委員の一人として、国立大学病院初の統合病院情報システム仕様書を完成させることに尽力されました。

平成17年に北海道大学病院検査部が国際的認証制度である臨床検査室の国際規格ISO15189の認定を日本で初めて取得した際には、マネジメント体系の確立など認定取得に貢献されました。

平成23年に臨床検査技師長に就任されてからは、診療に貢献する検査・輸血部の運営や、60名を超える臨床検査技師の認定資格取得などスキルアップの推進に尽力されました。

平成28年から務められた医療技術部長としては、臨床検査技師、診療放射線技師等12職種約240名の人事労務管理において、働き方改革に適應する管理体制を構築されました。また、兼務した超音波センター部長としては、院内全域の超音波診断装置約100台の保守管理体制の確立や調達方法見直しによる安全管理、さらには病院経営に関して大きく貢献されました。

以上のように、同氏の北海道大学病院において他の医療従事者と連携しながら患者診療を第一に考えた診療支援体制を構築した功績は誠に顕著であります。

略歴

生年月日	昭和36年9月17日
昭和58年4月	北海道大学医学部附属病院検査部
平成10年4月	北海道大学医学部附属病院検査部主任臨床検査技師
18年4月	北海道大学病院診療支援部副臨床検査技師長
23年4月	北海道大学病院診療支援部臨床検査技師長
28年4月	北海道大学病院医療技術部長
28年4月	北海道大学病院超音波センター部長
令和3年4月	日本医療大学保健医療学部臨床検査学科 講師

(北海道大学病院)



しもかわら
下河原 みゆき 氏

感想

この度、はからずも叙勲の栄を賜り、身に余る光栄と存じます。これもひとえに多くの皆様のご指導、ご支援の賜物と心から感謝

し、御礼申し上げます。

私は、昭和56年に北海道大学医学部附属看護学校を卒業後、北海道大学医学部附属病院に入職し、定年まで39年間勤務させていただきました。

最初に配属された婦人科病棟では、デリケートな問題を抱える患者の看護の難しさに悩みながら、看護師として早く一人前になろうと一生懸命、努力したのを覚えています。卒後2年目同士の夜勤時、急変患者を救命できなかった経験を通し、看護師としての責任の重さを知りました。全身管理を学びたいと昭和61年に第二外科・循環器外科病棟に異動しました。その頃はICUもなく、術後患者は挿管されたまま回復室に直帰し、呼吸器装着患者が常時、複数いるハードな職場でしたが、医師と看護師ともに患者を少しでも良くしようと真剣に向き合っている姿に魅力を感じ、「本当にそれで良いのかい？」といつも投げかけられ、看護の奥の深さ、醍醐味を教えていただいたことが大事な基盤となりました。また、千葉大学での半年間に及ぶ長期研修は、キャリアアップに大きく影響する転機となりました。平成3年に副看護師長、平成10年に看護師長となり、耳鼻咽喉科、物流管理センター、ICU・救急部、NICU・GCUナースセンターで勤務しました。医療環境や時代の変化に伴い、看護の変革期で求められる課題も多く、看護師長として何をすべきか常に考え、最善と思う道を選びながら取り組んできました。苦労もありましたが、それ以上に学びや喜び、達成感も多く、やりがいとなりました。平成25年に看護単位として独立したNICU・GCUナースセンターの初代看護師長として、看護体制を整備し、専門性の高い看護職の育成とともに、医療的ケア児のケアや家族への支援、地域と連携したチーム医療の推進に取り組みました。令和2年度第30回日本新生児看護学会では学

会長を務め、新生児看護の発展に貢献できたことは貴重な経験となりました。

北海道大学病院での39年間を振り返りますと、よき先輩、同僚、後輩に恵まれ、他職種を含む多くの方々にご指導・ご支援をいただいたこと、また患者、ご家族の皆様から学ばせていただいたことに感謝の気持ちで一杯です。今後はこの榮譽に恥じることはないよう過ごしてまいりたいと思います。

最後になりますが、北海道大学、北海道大学病院、看護部の発展をご祈念申し上げ、お礼の言葉といたします。

功績等

下河原みゆき氏は、昭和34年11月に北海道恵庭市に生まれ、同53年3月北海道恵庭南高等学校、同56年3月に北海道大学医学部附属看護学校を卒業し、同4月より北海道大学医学部附属病院に採用されました。平成3年11月に副看護婦長、同10年4月から看護婦長を歴任し、令和2年3月に北海道大学病院を定年にて退職するまで看護管理・教育の充実に向けて貢献されました。

同氏は、昭和60年3月まで婦人科病棟、同60年4月から平成9年3月まで第二外科病棟で勤務し、同3年11月には副看護婦長に就任されました。副看護婦長就任後は、部署の看護管理、スタッフや学生の指導に尽力し、平成8年には第21回日本看護研究学会において「院内各種委員の教育的意義についての考察—卒後2,3年目看護婦の実態調査より—」を発表されました。

平成9年4月から同10年3月まで放射線科病棟で勤務し、同年4月には優れた管理能力が認められ看護婦長に昇任し、耳鼻咽喉科に異動されました。平成11年には北日本看護学会において「耳鼻科領域の医療処置を要する末期がん患者が外泊するための家族へのアプローチ」を発表されました。平成14年には、第二外科、循環器外科病棟に異動し、治療を受ける患者の苦痛の緩和、心臓血管外科の手術後の回復を促進する看護を工夫し実践されました。平成16年には北海道看護研究学会において「急性大動脈解離で降圧療法を行った患者の苦痛緩和につながる看護援助の一考察」を発表されました。

平成18年から同20年までは物流管理センター、同21年から24年までは集中治療部・救急部の看護師長を歴任されました。この間、診療部署管理で行っていたファイバースコープ器材の滅菌の質向上の取組、MRSAのアウトブレイクを発生させないための感染対策、褥瘡の新規発生率減少への取組を実施されました。また、平成18年に日本看護協会認定看護管理者教育課程セカンドレベル研修を、同24年に同サードレベル研修を受講し看護管理者としての能力開発に努め、同25年には日本看護協会認定看護管理者に認定されました。

平成25年にはNICU/GCUナースセンターに異動し、医療的ケアが必要な児のケアや家族への積極的な支援、地域とも連携したチーム医療を展開されました。平成28年には、雑誌こどもケア「児と家族に合わせた退院計画・退院

調整」を投稿し、札幌市の「子どもの在宅療養ガイドブック」協議会協議員として作成に参画されました。平成27年度から同30年度には、北海道大学医学部保健学科及び保健科学院の臨床指導講師を務められました。

社会貢献では、令和2年度の第30回新生児看護学会学術集会大会長を務め広く新生児看護の質向上に寄与されました。公益社団法人北海道看護協会では平成14年度から同19年度に業務委員を、同28年度から29年度には学会委員を務められました。

以上のように同氏は、39年にわたり看護管理、継続教育、看護の質向上に尽力し、その功績は誠に顕著であります。

略歴

生年月日	昭和34年11月25日
昭和56年4月	北海道大学医学部附属病院看護部
平成3年11月	北海道大学医学部附属病院看護部副看護婦長
10年4月	北海道大学医学部附属病院看護部看護婦長
15年10月	北海道大学医学部・歯学部附属病院看護部看護婦長
16年4月	北海道大学病院看護部看護婦長
令和2年3月	北海道大学定年退職

(北海道大学病院)

株式会社バッファローからのパソコン用充電器の寄贈に対し 感謝状を贈呈

株式会社バッファローから、本学の
新入生全員（学部・大学院）を対象
に、USB Power Delivery対応のパソ
コン用充電器4,810台を寄贈いただ
いたことを受け、4月27日（水）、本学
事務局において感謝状贈呈式が執り行
われました。

贈呈式には、同社から渡邊泰治常務
取締役、富山真吾北海道営業所長、牧
誠財団武山幸司事務局長が、本学から

は山口淳二理事・副学長、平田公明学
務部長等が出席しました。

当日は、渡邊常務取締役から寄附目
録をいただいた後、山口理事・副学長
から、そのご厚意に対し謝辞が述べら
れ、感謝状が贈呈されました。

この度の寄贈は、同社が進める新型
コロナウイルス感染症対策支援プロジ
ェクトの一環として行われたもので、
コロナ禍により大きく様変わりした学

習環境に身を置く新入生にとって、教
育・研究を進めるうえで大きな後押し
となるものです。

寄贈いただいたパソコン用充電器
は、学部新入生は総合教育部を、大学
院新入生は各学院・研究科を通じて配
付予定です。

（学務部学務企画課）



右から株式会社バッファロー 渡邊常務取締役と山口理事・副学長



前列右から株式会社バッファロー 渡邊常務取締役、山口理事・副学長
後列右から牧誠財団 武山事務局長、平田学務部長、西田政利学務企画課長

インターンシップで始める就活準備ガイダンスを開催 ～令和4年度キャリアセンター就職ガイダンスがスタート～

4月15日（金）、キャリアセンター主催「インターンシップで始める就活準備ガイダンス」をオンラインで開催しました。

キャリアセンターでは、年間を通じて就職活動やインターンシップに参加する学生へのガイダンスや講座、セミナーを開催しており、年間で延べ約10,000名以上の学生が参加しています。今回は令和4年度の初回ガイダンスとして、この夏にインターンシップへの参加を検討する学生に対し、現在の就職活動やインターンシップの状況を伝えるスタートアップのガイダンスとして開催し、オンラインで約500名の参加がありました。

まず、亀野 淳キャリアセンター長が挨拶し、続けてキャリアセンターの小林麻衣キャリアアドバイザーから、

簡単に現在の就職状況について説明を行いました。

次に、4名の就職情報会社の方にご登壇いただき、オンライン化した現在の就職活動や企業側の採用活動についての講演を行いました。講演はキャリアセンターの太田順也インターンシップマネージャーの進行のもと、パネルディスカッション方式で実施し、学生の不安や疑問について、ネット上では得ることが難しい本音や実情をまじえ、様々な角度からの話をいただきました。事前に学生から質問を募集したほか、当日は40分以上にわたって質疑応答を行い、学生の不安や疑問を解消する内容を盛り込み、参加した学生からは、「企業視点の話を聞くことができてよかった」「データや数値で具体的に説明があった」など、勉強や研究

と両立しながらの活動や不安を解消するアドバイスなど、本学の事情に沿った内容に満足の声がありました。

キャリアセンターでは、学部1・2年生からのキャリアガイダンス、インターンシップの支援、就職ガイダンスなど、年間を通じて様々なセミナーを行っています。多くのガイダンスは後日ELMS上で視聴することが可能です。また、就職活動について学生への個別相談も実施しています。

詳細はキャリアセンターのホームページで随時公開していますので、ぜひ学生の方へご案内ください。

<https://cc.academic.hokudai.ac.jp/>

（キャリアセンター）

日時：2022年4月15日（金）18：30～20：30

会場：オンライン配信及びオンデマンド配信 ※オンデマンド配信について学生はELMSで視聴可能

パネリスト：株式会社ジェイ・ブロード 北海道支社長 菅野万里子 氏

株式会社ディスコ 北海道支社長 松岡孝史 氏

株式会社マイナビ 就職情報事業本部就職ナビ統括本部 東日本統括部長 相木良介 氏

株式会社リクルート 新卒Division大学支援推進部 就職ジャーナル編集長 中田充則 氏

主催・企画・当日進行：キャリアセンター



当日のパネルディスカッション講演の様子



進行を行う太田インターンシップマネージャー

2021年度春季国際インターンシップ全学成果報告会を開催

高等教育推進機構では、4月28日（木）に、2022年3月にオンラインで実施した国際インターンシップの成果報告会を開催しました。

「国際インターンシップ」とは、グローバルに事業を展開する企業・機関等の海外拠点にて、就業体験型として研修を行う実践的キャリア教育プログラムです。研修を通し学生が、国際性とリーダーシップ力を醸成するとともに、グローバルな視点で自らのキャリアや今後の進路について考えることを目的としています。本プログラムは、2016年度に3ヶ国・地域、3拠点、4名を派遣することで試行的に開始され、それ以降、多くの受入企業・機関のご支援の下、年々プログラムを拡充してきました。2019年度には14ヶ国・地域、48拠点にて実施し、73名を派遣

しています。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により海外派遣は実現しませんでした。7ヶ国・地域にまたがる11企業・機関の研修先と中継し、初の試みとしてオンラインを活用したインターンシップを成功させることができました。2021年度も残念ながら海外派遣は実現しませんでした。夏季プログラムでは13カ国・地域にまたがる19企業・機関と中継し56名の学生が、春季プログラムでは4ヶ国・地域にまたがる4企業の研修先と中継し、12名の学生がオンラインを活用したインターンシップを実施し、年度合計68名の学生が参加致しました。本プログラムについては、研修先及び参加学生の双方から高い評価を得ています。

本報告会では、2021年度春季のオンラインインターンシップに参加した12名の学生が、それぞれ研修で得た学びについて報告しました。支援企業のご担当者や本学学生・教職員など、学内外や研修先海外拠点から多くの方々が対面もしくはオンラインで参加頂きました。学生発表終了後には、参加企業の方々から本報告会へのご講評及び発表学生への励ましのお言葉がありました。

高等教育推進機構では、コロナ禍の環境においても、グローバルな視野を持ち、変化の激しい社会の多様性に対応できる学生を育成するため、今後も国際インターンシップを充実させてまいります。

(学務部国際交流課)



開会挨拶を行う山口淳二理事・副学長



研修成果を発表する学生

寶金総長が北京科技大学創立70周年記念学長フォーラムにオンライン出席

4月20日（水）、寶金清博総長が北京科技大学創立70周年記念学長フォーラムにオンライン出席しました。

北京科技大学は本学が1986年に中国の大学としてはじめて大学間交流協定を締結した大学であり、それ以降、主に工学分野において継続的に教育研究交流を推進してきました。

本学長フォーラムでは、北京科技大学のYAN Xiangbin副学長による出席者紹介及びWU Guilong書記による開会挨拶に引き続き、7カ国から参加した11大学の代表者が“Envision future higher education featuring innovative collaboration”（革新的コラボレーションで未来の高等教育を描く）をテーマに講演を行いました。

寶金総長は“SDGs and Innovative Collaboration Case of Hokkaido

University, Japan”と題した基調講演を行い、これまでの本学と北京科技大学の連携の歴史を紹介するとともに、GI-CoREやICReDDに代表される海外の研究者とのコラボレーションをはじめ、ラーニングサテライトやHokkaido Summer Instituteを通じた教育分野でのコラボレーション事例の他、本学の

国際戦略やSDGsへの取組と貢献について発表しました。

今回の学長フォーラムへの出席を契機に、北京科技大学との交流がより一層前進することが期待されます。

（国際部国際連携課）



講演を行う寶金総長

鈴木貴子外務副大臣が来学

4月20日（水）、鈴木貴子外務副大臣とJICA北海道センターの石丸 卓所長らが来訪されました。

鈴木副大臣らは、横田 篤理事・副学長と行松泰弘理事を表敬訪問し、横田理事・副学長より本学の概要について説明を受けました。世界大学ランキングやコロナ禍における外国人留学生受入れへの影響について関心を示され、質問する場面もありました。

その後、本学に在学するJICA長期研修員との懇談を行いました。懇談には

工学院博士課程のApete Soro Tuiyaroさん（フィジー出身）、Pilakka Veedu Anjuさん（インド出身）、経済学院博士課程のChabi Montchebolatan Nicoleさん（ベナン出身）が出席し、自己紹介の後、本学での研究内容や北海道での生活について紹介を行いました。鈴木副大臣からは、母国では学ぶことが難しいが本学で経験できたことや日本で

の生活で困っていること、修了後のキャリアなどについて質問がありました。研修員は本学での学びを母国で活かし、日本と母国の懸け橋になりたいと述べるなど、和やかな懇談となりました。

（国際部国際連携課）



JICA研修員との懇談の様子



鈴木副大臣（中央）との記念撮影

令和4年度第1回 定例記者会見を開催

4月14日（木）、本学の特色ある教育研究活動や運営状況等を社会に向けてわかりやすく発信することを目的とした「定例記者会見」を開催しました。吉見 宏理事・副学長（広報・社

会連携室長）の進行のもと、山本文彦理事・副学長、石森浩一郎副学長及び農学院博士後期課程2年の森田 豪氏が発表し、北海道教育庁記者クラブ加盟社等から7名の参加がありました。

発表内容は以下の通りです。

（社会共創部広報課）

発表事項（発表者）

- ・第4期中期目標計画期間における大学院改革の加速について
（理事・副学長 山本 文彦, 副学長 石森 浩一郎）
- ・DX博士人材フェローシップ
（農学院 博士後期課程2年 森田 豪）



定例記者会見の様子



発表を行う山本理事・副学長



発表を行う石森副学長



記者からの質問に答える森田氏

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 札幌創成高校へ向けて2名の研究者が講義を実施

本学の第一線の研究者が、出張講義などを通じて高校生に研究を伝える「Academic Fantasia (アカデミックファンタジスタ)」。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環

として、北海道新聞社の協力のもと、2021年度より実施しています。

3月は札幌創成高等学校に向けて、2名の研究者がオンライン講義を実施しました。

2021年度は、17名の教員が12の中学校・高校を対象に出張講義またはオンライン講義を行い、およそ1,000名の生徒が参加しました。



北海道の高校生と対話する
ACADEMIC FANTASISTA 2021
アカデミックファンタジスタ
ACADEMIC FANTASISTAは、北海道大学の研究者が、知の最前線を出張講義や現場体験を通して高校生に伝える事業です。2021年度は、12の中学校・高校を対象に出張講義またはオンライン講義を実施し、およそ1,000名の生徒が参加しました。

可能性のページをめくろう。

(2021年度 講師)
「新薬開発で動物をがん・感染症から救う」 薬理学研究所 准教授 今内 寛
「顕微鏡でみるミクロな水中の世界」 偏光科学研究所 准教授 木村 勇気
「中国文学と隣国語」 文学部 准教授 田村 啓子
「MRIで認知症や神経難病の早期発見を目指す」 医学部 准教授 工藤 興亮
「再生医療で歯を治す」 医学部 准教授 川端 真人
「医師はAIに勝てるのか?」 医学部 准教授 平田 健司
「体に優しい高精度陽子線治療をもっと身近に」 工学部 准教授 橋本 孝之
「動くがんを狙い撃つ放射線治療技術」 工学部 准教授 宮本 直樹
「原子をやつり新しい材料をつくる」 工学部 准教授 米澤 徹
「放射線・放射能の科学」 工学部 准教授 小崎 充
「元素と原子と分子のおはなし」 化学反応創成研究拠点 / 工学部 准教授 伊藤 肇
「有機化合物の常識を打ち破る」 理学部 准教授 石塚 伸祐
「がん細胞の動きを止める」 先端生命科学研究センター 教授 芳賀 永
「糖と生命」 先端生命科学研究センター 教授 比能 洋
「アイヌ民族の歴史から世界を見る」 アイヌ先住民研究センター 教授 加藤 博文
「夢のエネルギー 人工合成の実現に向けて」 電子科学研究所 特任教授 三澤 弘明
「漸化式を使って様々な現象を数式にしてみよう」 電子科学研究所 附属社会創造数学研究センター 教授 長山 登晴 (隔不同)

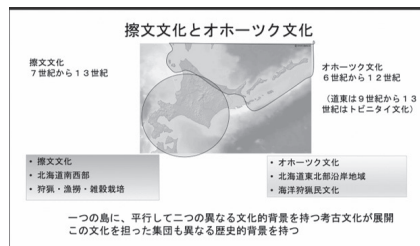
2022年度の募集時期は8月頃を予定しています。本事業に興味のある教育関係者の方は右記にお問合せください。企画制作/北海道新聞社営業局 営業本部 Tel.011-210-6167(アカデミックファンタジスタ担当:上原・富田) 受付時間/9:30-17:30(土・日・祝日を除く)



事業報告広告 (2022年3月22日 北海道新聞朝刊掲載)

「いま学ぶアイヌ民族の歴史 一先住民研究で世界をつなぐー」 アイヌ・先住民研究センター 加藤博文 教授

有形無形の文化遺産から人類の歴史を読み解いている考古学者の加藤教授。講義では、教科書には載っていない北海道の先住民の歴史や文化を解説しました。また、北海道の地域史を理解するためには、世界でどのような文化が展開していたのか、民族同士にどのような交流があったのかを知る必要があり、「グローバルな視点を持つことも重要」と、語りました。



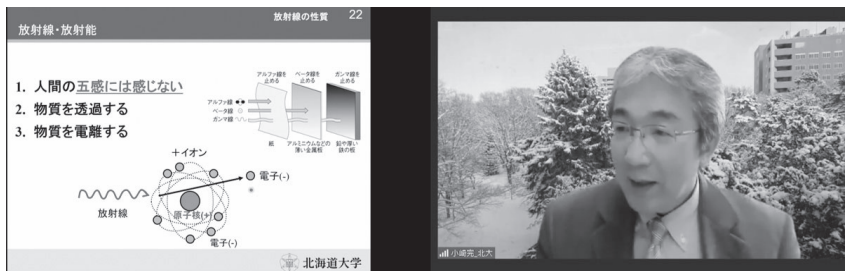
北海道の歴史や先住民文化について解説する加藤教授



日 時: 2022年3月10日(金) 9:00-10:30
対 象: 札幌創成高等学校
参加生徒: 1年生 73名(オンラインにて実施)

「放射線・放射能の科学」 工学研究院 小崎 完 教授

放射性廃棄物をより安全かつ確実に処分するための研究に取り組む小崎教授。講義では、放射能・放射線発見の経緯、それらの性質、高レベル放射性廃棄物の処分方法等について紹介しました。核分裂が生み出すエネルギーの大きさを、架空の生物「ゴジラ」を通して表現するなど、高校生にも分かりやすく解説しました。



放射線の性質について解説する小崎教授

日 時：2022年3月10日（金）10：40－12：10

対 象：札幌創成高等学校

参加生徒：1年生 97名（オンラインにて実施）

アカデミックファンタジスタは2022年度も実施します。多くの教職員の方々の参加をお待ちしています。

研究広報特設サイト「リサーチタイムズ」やFacebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

リサーチタイムズ <https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/academic-fantasista/>

Facebook @Hokkaido.univ.taiwa

(社会共創部広報課)

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をする事としています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報
基金累計額（3月31日現在）

33,004件 5,841,256,690円

3月のご寄附状況

法人等36社、個人224名の方々から79,510,387円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社アウレオ、岩見沢市立総合病院、一般社団法人インフォカート未来基金、栄研化学株式会社、荏原環境プラント株式会社、株式会社OHEN、株式会社学生情報センター、株式会社北のたまゆら、株式会社クリーンリバー、医療法人札幌麻生脳神経外科病院、札幌徳洲会病院、医療法人 徳洲会 札幌東徳洲会病院、市立千歳市民病院、NPO法人 シュマリナイ湖ワールドセンター、新道東皮膚科クリニック、株式会社総合設備コンサルタント、たけだ皮膚科スキンケアクリニック、月島機械株式会社、株式会社トワニ、社会医療法人医仁会 中村記念病院、ニチニチ製薬株式会社、株式会社日立製作所、医療法人社団北秀会、北海道漁業協同組合連合会、北海道大学校友会エルム、医療法人社団研仁会 北海道脳神経外科記念病院

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青木 俊介	青木 良仁	阿部 竜彦	阿部 雅史	荒田キヌコ	猪熊 大輔	飯谷 麻里
池田 輝明	池田 慎	石井 清一	石井 哲夫	石川 恵美	稲垣 浩司	井原 博	入澤 秀次
梅本 由佳	枝澤 寛	緑記 和也	遠藤 公憲	大家 邦久	大里 孝夫	大澤 國雄	大原 正範
小木曾 仁	奥田 貴志	奥田 英信	奥山 悦男	小倉 守彦	小田原一史	小原 大和	角田 敏男
金川 眞行	金子豊三郎	亀田 玲奈	川合 榮邦	川崎 勝	河村 裕	河本 充司	北浦 絹子
衣川 暢子	木村 祐介	木村 幸文	工藤 寛	城田くに子	五箇野紘一	小林 賢人	齊藤 晋
齋藤 久	斎藤瑠衣子	坂本 大介	桜井 優弥	桜庭 衡	桜庭 節子	左近 祥夫	佐々木亮子
澤辺 智雄	三升畑元基	志済 聡子	柴田 祐次	澁川 成弘	渋谷真希子	清水 宗敬	下斗米啓介
菅原 新也	菅原 修孝	杉江 和男	鈴木 貴之	関根 君恵	絶対 零子	瀬名波栄潤	相馬恵理子
外山 信一	詫間 滋	田代理枝子	巽 聡子	立野 正敏	谷 幸政	谷 佳津子	土家 琢磨
出口 良二	寺澤 睦	豊田 威信	鳥潟 肇	中川 洋	中島 進一	長瀬 博	中塚 英俊
中村 克宏	中村 徹	中村 将	西田 実弘	西本 純	新田 幸絵	根本 治	橋本 圭司
鉢呂 喜一	花田 秀一	人見 美哉	福士 幸治	福永 悟郎	藤澤 裕子	藤田 尚正	古谷健太郎
細川 敏幸	細川 正夫	本郷 隆二	本間 昭一	前田 博	眞木賀奈子	政氏 伸夫	増田 隆夫
町田 貴裕	町田 宗正	松浦 洋昌	松浦 史弥	松田 健一	松原 謙一	万浪 義史	宮尾幸之助
宮田 信幸	村上 泰一	村上 幸夫	村瀬徳啓充	門出 京子	矢ヶ崎啓一郎	矢嶋 剛	山崎 知文
横山 考	吉井 誠	吉田 広志	萬 豊	LeeAbby	脇坂 明美	渡辺明日香	

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（個人）

池田 輝明, 枝澤 寛, 亀田 玲奈, 五箇野紘一, 斎藤瑠衣子, 相馬恵理子, 町田 宗正, 萬 豊

（法人）

荏原環境プラント株式会社, 株式会社学生情報センター, 株式会社北のたまゆら, 株式会社クリーンリバー,
NPO法人 シュマリナイ湖ワールドセンター, 株式会社総合設備コンサルタント, 社会医療法人医仁会 中村記念病院,
北海道漁業協同組合連合会

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html>

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

（社会共創部広報課）

北大コアファシリティ構想研究支援人材育成プログラム マルチスキル人材育成プロジェクト 令和3年度第2回部局・分野横断技術交流会「光学顕微鏡の 観察の新展開：光学分解能を超える観察とリモート観察」を開催

3月24日（木）に電子科学研究所、ニコイメージングセンターにおいて部局・分野横断技術交流会「光学顕微鏡の観察の新展開：光学分解能を超える観察とリモート観察」を開催しました（コーディネーター：電子科学研究所技術部 小林健太郎、中野和佳子）。

本技術交流会は、技術職員が自ら企画、運営、講義を行い、スキルの継承・伝達・強化を図り、また異分野の技術職員と技術を通して交流することで、技術職員の全学的な人材交流・技術情報交流・技術強化を図る事を目的とした北大コアファシリティ構想研究支援人材育成プログラム、マルチスキル人材育成プロジェクトの事業として行われました。

午前の講義は、特別企画として自然科学研究機構生理学研究所生命創成探

究センターの堤 元佐特任助教をお招きし、受講者以外にも全学の技術職員、教職員、学生を対象にZoomで配信されました。この講義の中では極めて微細な構造を観察できる顕微鏡の概略や原理、微細構造を可視化する画像演算法の説明とその実例、そしてリモートワーク・ツールによる遠隔地からの装置稼働方法が説明されました。

午後からはコーディネーターが講師となり、微細構造の観察を目的とした実習を行いました。生きている細胞の内部構造を数秒間隔で観察、あるいは細胞全体を迅速に観察して細胞内構造の3次元モデル構築を行いました。実習後半では、先ほどまで手を触れて操作していた装置を、リモートワーク・ツールを使用することで、実機から離れていても稼働できることを確認しま

した。

今回の講義には最大50名ほどの大勢の方が参加され、講義後には活発な質疑応答、意見交換が行われました。また講義・実習の受講者からも大変役に立ったという評価をいただき、とても有意義な交流会となりました。この「部局・分野横断技術交流会」は、今後も様々なテーマで継続して行う予定です。

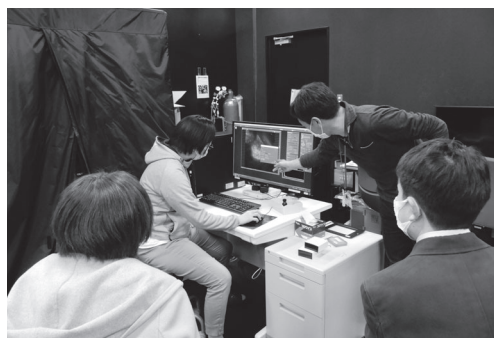
主催：技術支援・設備共用コアステーション（CoSMOS）

共催：電子科学研究所ニコイメージングセンター、先端バイオイメージング支援プラットフォーム（ABIS）

（技術支援本部）



堤特任助教による講義の様子



顕微鏡を用いた実習の様子

きたキッチンオーロラタウン店で「北海道大学フェア」を開催

4月6日（水）から12日（火）にきたキッチンオーロラタウン店で「北海道大学フェア」を開催しました。株式会社北洋銀行と株式会社北海道百科の連携企画による、道内の大学が開発に関わった食品等をきたキッチンオーロラタウン店で販売するもので、その第1弾として北海道大学が選ばれました。本フェアでは単なる商品の陳列だけではなく、ストーリー性や研究成果を一緒に伝えることにより、商品のPRと大学のブランド力向上を目指しました。

北海道大学フェアでは、数ある北大認定商品の中から40アイテム近くを出

店しました。

北方生物圏フィールド科学センターの生産物である北大短角牛や、北大牛乳、りんご、木材を活用した商品です。また、水産科学研究院の研究成果である北大ガゴメ®を活用した商品や、海洋深層水を加えたおしよろ丸カレーなど、総合大学の特色を活かしたバリエーション豊かな商品に、来店のお客様からも驚きの声を頂きました。

本フェア一番の注目を集めたのが静内研究牧場で飼育されている北大短角牛で、テレビ局やラジオの取材でも大きく取り上げられました。どの商品も売り切れが相次ぎ、再入荷がされると

まとめて購入をしていく姿も見られました。

フェア初日には、寶金清博総長、増田隆夫理事・副学長も来店し、各商品を開発した企業の皆様とご挨拶をかわしました。

今後も産学・地域協働推進機構では、北海道大学認定商品を通じたブランド力の向上と情報発信により、地域との連携と社会貢献に努めてまいります。

（産学・地域協働推進機構）



左から増田理事・副学長、株式会社わか佐々木学代表取締役社長、寶金総長（※写真提供：広報課）

北大×サントリー 鏡月Greenマーケティング施策考案プロジェクトを実施

産学・地域協働推進機構では、サントリースピリッツ株式会社と協働して、鏡月Greenのマーケティング施策を考案するプロジェクトを実施しました。プロジェクトでは、大学生の意見を広く集めるアンケート調査と、参加を希望した学生とサントリースピリッツ株式会社の社員による座談会を行いました。

本プロジェクトでは、学生のリアルな価値観や意見を収集し北海道ならではのマーケティングを考案すること、

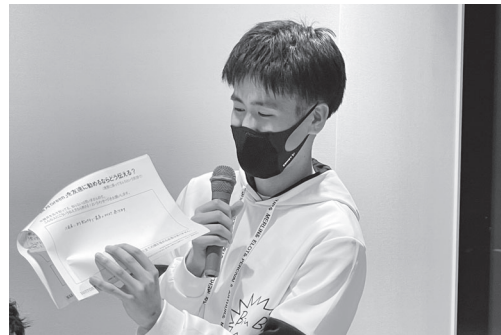
並びに、学生が実際の商品を通じてプロモーションを考える実体験を交えた学びの「場」を提供することを目的として実施しました。

アンケート調査では、71名の方にご協力いただき、3月24日（木）には学生10名と2時間の座談会を行いました。座談会では、普段のライフスタイルや、飲酒習慣、鏡月のイメージやキービジュアルの印象などを話し合い、割材と合わせた鏡月Greenの新たなアレンジ方法やそのコミュニケーション

方法の検討を行いました。その結果、自分たちの世代にあった新しい飲み方や店頭POPアイデアの考案を行い、全体での発表を行いました。

本プロジェクトで考案されたアイデアは、Z世代に向けた新たなプロモーションアイデアとして実際に活用される予定です。

（産学・地域協働推進機構）



座談会の様子

株式会社HBAとの北海道フードロス削減プロジェクトを実施

産学・地域協働推進機構では株式会社HBAと協働し、学生7名（北海道大学4名、小樽商科大学1名、札幌市立大学2名）と共に、北海道地域のフードロス解消に向けてプロジェクトを立ち上げ、道内の農家の方々の野菜を活かした商品開発を行いました。規格外やB級野菜など市場に出回ることなく廃棄される「生産現場で発生するフードロス」は年間約150万トンから200万トンとされています。そして、北海道は広大な土地から生産現場で多くのフードロスを抱えています。

プロジェクトは11月にキックオフを迎え、実際に新ひだか町のほうれん草農家である上島農園にお伺いし、ほうれん草の収穫から発送までの一連の流れを体験しました。ロス品として出てしまうサイズが小さいものや袋詰めの際に捨てられてしまう一番外側の葉な

どを活用した商品アイデアの創造に取り組みました。ほうれん草に加え、三笠市の山崎正大氏の規格外となってしまったたまねぎも活用しました。レトルト食品やだし・タレなど調味料の製造メーカーであるアイビック食品株式会社や、包装資材を扱う株式会社包装企画、野菜調理を行う株式会社桐越、フードロス問題に関する活動を行っている木村健太郎氏のご協力の下、本プロジェクトではレトルトカレーを創りました。

出来上がったレトルトカレーは「未来からきたカレー」と名付けられ、コンセプト創造からパッケージデザイン、紹介冊子、特設ウェブサイトの制作まで、全て学生メンバーが中心となり行いました。フードロス問題を自分事化する学びの場として、実際に農家を訪問し、土に触れ、収穫を体験し、

肌で感じた現状をデザインやコンセプトとして表現をしています。

レトルトカレーは、医療従事者の皆様や地域の方々へ寄贈致しました。

この活動は、美味しさは変わらないのに廃棄されていた食材に新たな価値を生み出し、少しでも地域に貢献することを目的として行われました。北海道の生産者、企業、学生が一緒にひとつのチームとなって取り組むことで、フードロスの課題解決に向けた地域の「輪」を広げました。

学生が制作した特設WEBサイト：
<https://www.hbasocialcontribution.com/miraicurry/>

（産学・地域協働推進機構）



上島農園での農作業後



食のDX拠点GOKANにて味を検討している様子



ほうれん草の袋詰めの様子



完成した「未来からきたカレー」

第16回サステイナブルキャンパスマネジメント本部 ステークホルダー座談会を開催

サステナビリティ推進機構サステイナブルキャンパスマネジメント本部では、3月28日（月）、第16回ステークホルダー座談会を百年記念会館で開催しました。

当該ミーティングは、ステークホルダーエンゲージメントの一環として毎年開催しており、今年で16回目となります。今回は、「SDGsに貢献する北大の知のフィールド - 新時代に向けた北大の可能性と社会連携 -」をテーマ

に、脱炭素・包摂的社会的構築に向けた社会変革の主要なプレーヤーとしての役割を果たすために、本学が有する資産、なかでも広大な研究林に焦点をあて、その多様なフィールドワークやモニタリング、自然環境保全の新しいあり方、及び北大というフィールドのもつ可能性について様々な視点から自由に意見交換いただきました。また、地域の課題解決やSDGsに貢献する、新時代へ向けた社会連携の進化した姿

について話し合いました。

本座談会でいただいた多くのご意見は、本学の今後の活動に活かしてまいります。なお、詳細は9月末公表の「北海道大学サステナビリティレポート2022」に掲載する予定です。

（サステナビリティ推進機構
サステイナブルキャンパスマネジメント本部）

<テーマ>

「SDGsに貢献する北大の知のフィールド - 新時代に向けた北大の可能性と社会連携 -」について、自由に討論していただきました。

<参加者>

※ 敬称略、役職は当時

川村秀明 北海道 総合政策部 計画局 計画推進課長

横田 篤 北海道大学理事・副学長、SDGs推進本部長

佐藤冬樹 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・センター長

朴 炫貞（パク・ヒョンジョン） 北海道大学科学技術コミュニケーション教育研究部門CoSTEP特任講師

ファシリテーター／今津秀紀（凸版印刷株式会社 TOPPAN SDGs Unit リーダー シニアコンサルタント）

<座談会／自由討議>

14：50～17：00

議題1 北大が有する資産を活用し、どのSDGsの達成に貢献するか、あるいはどのように脱炭素・包摂的社会的構築に貢献していくか。たとえば、広大な研究林を持つ大学だからこそその貢献とは？

議題2 脱炭素・包摂的社会的構築やSDGsの達成に向けて、進化した地域連携・社会連携の姿とはどのような姿か。また、大学はそれに向けてどのようにアプローチすべきか。

議題3 脱炭素・包摂的社会的構築やSDGsの達成に向けて、北大ならではの貢献はどのような事が考えられるか。また、どのような事が求められているか。



座談会の様子

■ 部局ニュース

2022年度北海道大学スマート物質科学を拓くアンビシャスプログラム第2期生採用式を開催

4月4日（月）、2022年度北海道大学スマート物質科学を拓くアンビシャスプログラム（以下、SMatS）第2期生採用式が理学部本館大会議室にて執り行われました。

このプログラムは、博士後期課程の大学院生に対して、専門分野の研究にとどまらず、スマート物質科学力ならびに社会実装実現力を養成するもので

す。武次徹也コーディネーターが4名のプログラム生に認定証を授与しました。

会場となったのは90年以上の歴史がある理学部本館大会議室です。第2期生として採用された博士後期課程の4名は、これから数理学と計算科学、データサイエンスを学びながら異分野融合あるいは産学官連携にも取り組み

ます。

詳細はウェブマガジンPh.Discover <https://phdiscover.jp/phd/article/1375> をご覧ください。

（総合化学院・理学院・工学院・環境科学院・生命科学院・情報科学院）



武次コーディネーターの挨拶を聞く2期プログラム生



2期生集合写真

理学部生物科学科（高分子機能学）「ハイフレックス授業」FDを開催

理学部生物科学科（高分子機能学）では、本学及び理学部の授業開講方針に沿って、対面授業を基本としています。新学期からの受講学生に対して遠隔講義の必要性を調査した結果、対面授業の受講が困難と思われる学生がいることが明らかとなり、学科として、ハイフレックス形式の授業を実施することになりました。

ハイフレックス形式は、対面授業と

同時に、遠隔への受講者に授業を同時配信、更に録画した画像を二次利用するもので、今後予想される新型コロナ罹患患者にも対応が可能と考えています。

ハイフレックス形式の授業は、学科としてあまり経験がないため、機器の準備方法や音声や画面など活用方法や留意点などの説明会を3月22日（火）に行いました。4月から講義を担当す

る10名の教員が参加され、学科長の黒川教授から機器の接続方式、学生とのコミュニケーションの取り方等などの説明がなされました。

今後、対面かオンラインかという二択ではなく、新たな形式の講義が望まれるものと考えています。

（理学部）



黒川先生による機器説明の様子

先端生命科学研究院FD「特許出願を意識した審査会」を開催

先端生命科学研究院では、更なる産学連携推進を目指し、産学・地域協働推進機構と協力し、研究院内で実施している研究の社会実装化に努めています。その一環として、3月23日（水）に特許出願の新規性を保つ意義、発表会などへ臨む際の新規性を損なわない対応を学ぶFD研修を実施しました。

特許出願と学士、修士、博士審査会への対応について、産学・地域協働推進機構副機構長及び産学連携推進本部本部長である寺内伊久郎教授が講演されました。

発表会という公的な場に対し、公知することが出来ない内容が含まれる場合、非公開での開催、秘密保持誓約書

の提出などの対応で実施されている大学等もあり、今後の運営、学生指導に反映させていく重要性を確認することができました。今後の改革につなげられる情報共有の場として有意義な時間となりました。

（生命科学院・先端生命科学研究院）

水産学部附属練習船「うしお丸」代船 命名・進水式を挙行 ～新船を「うしお丸」と命名～

水産学部附属練習船「うしお丸」代船に伴う命名・進水式を、3月30日（水）に新潟県新潟市の新潟造船株式会社新潟工場にて行いました。

春を感じる快晴の中、本学からは寶金清博総長、木村暢夫水産学部長、進藤謙一うしお丸機関長、佐藤哲生函館キャンパス事務部事務長、横山 清北水同窓会長、他12名が列席し、新潟造船株式会社 岩松安則代表取締役社長ら関係者を含め計20名が出席しました。

命名・進水式では、寶金総長が新船を「うしお丸」と命名し、寶金総長の

ご令嬢による支綱切断により「うしお丸」は進水しました。

支綱切断とは、新たに建造された船舶を最後に繋いでいる「支綱」を切断する儀式であり、「新しい船が生まれる」という意味からこの儀式は女性によって行われることが多く、今回のうしお丸においても歴代の練習船と同様に、命名者である総長のご令嬢に行っていただきました。

新船は全長約45m、幅約8m、総トン数は約260トン、最大搭載人員は33名（内教員学生17名）であり、沿岸域に接岸可能な機動性を有しながら、海

洋調査の取得データ精度向上のため、水中放射雑音を低減した設計となっております。最新の調査設備を搭載し、居住性を向上させることで学生教育及び研究調査等を今まで以上に進めていきます。

今後は引き続き新潟造船株式会社新潟工場にて艤装工事、海上公試等を実施した後、本年の夏頃までに本学へ引き渡しされる予定です。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



命名する寶金総長



命名・進水を終えた「うしお丸Ⅲ世」

人獣共通感染症国際共同研究所が人獣共通感染症研究拠点研究シンポジウムをオンラインで開催

人獣共通感染症国際共同研究所は、平成22年度に文部科学省から「人獣共通感染症研究拠点」として共同利用・共同研究拠点の認定を受け、本研究所の施設、設備、生物資源と人材育成プログラムを全国の関連研究者の利用に供し、人獣共通感染症の克服に向けた研究・教育を推進してきました。しかしながら、本事業は、第3期中期目標期間の最終年度である令和4年3月をもって終了することから、3月17日（木）に、「人獣共通感染症研究拠点研究シンポジウム」をオンラインで開催しました。

始めに、本学の喜田 宏ユニバーシティプロフェッサーが、COVID-19の感染拡大にみられるように、人獣共通感染症がパンデミックを起こしている状況下で、本学と特定共同研究に携わる研究者が、各大学の強みを活かし、人獣共通感染症克服に向けた研究成果を挙げたことに対する謝辞を述べました。

講演では、人獣共通感染症国際共同研究「特定共同研究」の研究代表者で

ある当研究所の鈴木定彦教授が、「人獣共通感染症克服に向けたイノベーション創出と地球規模の感染症対策」と題し、当研究所が人獣共通感染症の発生と流行を予測する「先回り戦略」として、自然宿主動物の同定と伝播経路の解明、宿主域と病原性の分子基盤の解明、予防・診断・治療法の開発を柱に研究を進めていることを説明しました。次に、病原体の宿主域・病原性・組織向性の解析、病原体ゲノム情報等の大規模解析、予防・診断・治療法の開発と実用化研究、人獣共通感染症対策専門家の育成、共同利用・共同研究拠点としての国内外機関との連携協力の6つの観点から、当研究所の研究活動の成果について発表しました。

続いて、東北大学の児玉栄一教授が、「災害としての感染症リスクに対する分野融合型イノベーションと地球規模の早期対応に関する研究」、岐阜大学の福士秀人教授が、「難治性人獣共通感染症の診断・予防・治療法の開発研究」、滋賀医科大学の伊藤 靖教授が、「カニクイザルを使用したイン

フルエンザウイルス感染の重症化因子解明と予防法、治療法開発」、鳥取大学の伊藤壽啓教授が、「鳥由来人獣共通感染症病原体の解析」、宮崎大学の吉田彩子教授が、「One Healthに向けた動物感染症制御の実践的教育・研究基盤強化」と題する講演で、平成28年から実施している人獣共通感染症研究の集大成となる成果と実績を報告しました。

講演終了後の総合討論で、「特定共同研究」の研究者と外部委員が、質疑応答と意見交換を行いました。また、24件の「一般共同研究」実施者は、ポスターにより、参加者の皆様に成果を発表しました。本シンポジウムには、42名が参加して、One Health, One World理念の傘下で、人獣共通感染症の克服に向けた本研究所と他大学の共同研究の取り組みと進捗状況を共有する有意義な機会となり、盛会のうちに終了しました。

(人獣共通感染症国際共同研究所)



シンポジウムの参加者



総合討論の様子

ポーランドの東方研究センターとの緊急共催セミナーを開催 War in Ukraine and beyond: Polish and Japanese Perspectives and Recommendations

4月20日（水）、ポーランド大使館とのパートナーシップのもと、ポーランドでロシア研究をリードする東方研究センター（OSW）とスラブ・ユーラシア研究センターによる「ロシアのウクライナ侵攻」に関する共催セミナーが開催されました。当センターの岩下明裕教授の開会の辞をうけて、OSWのアダム・エベルハルト所長の紹介により、駐日ポーランド大使のパヴェウ・ミレフスキ氏が登壇され、この戦争に関するポーランドの対応などが説明されました。

セミナーは、エベルハルト所長、岩下教授による、戦争推移や国際情勢に関わる報告に続き、OSWからヴォイチェフ・コノンチュク副所長、当センターから田畑伸一郎教授がそれぞれEUの対応、経済的な影響を分析しました。本学公共政策大学院の池 炫周直美准教授とポーランド大使館のトマシュ・グヴォズドフスキ氏がモデレーターを務め、ヨーロッパの対応や中国の動きなども含めて活発な討論が行われました。

最後に、外務省欧州局の徳田修一審

議官が戦争に対するコメントを寄せ、日本の立場を紹介してセミナーを締めくくりました。国内外の多くの方々に視聴いただきましたが、本学のホームページからもセミナーの動画をご覧いただけます。

<https://www.global.hokudai.ac.jp/blog/war-in-ukraine-and-beyond-polish-and-japanese-perspectives-and-recommendations/>

（スラブ・ユーラシア研究センター）



オンラインセミナーの様子

観光学高等研究センターとひがし北海道自然美への道DMOが連携協定を締結

観光学高等研究センターと一般社団法人ひがし北海道自然美への道DMOは、4月7日（木）に連携協定を締結しました。観光による地域創生、観光産業の転換、ライフスタイル・イノベーション、観光分野の国際協力をテーマに活動する観光学高等研究センターと、観光関係者の資質の向上、観光関連事業の健全な振興、旅行者の利便の増進・安全の確保及び市民生活の向上を目的に活動する一般社団法人ひがし北海道自然美への道DMOが、産学連携協力体制をとることにより学術研究・地域振興・教育など多岐にわたる相互協力体制を構築し、北海道を牽引する観光地創造の提言、実践を目指します。具体的には、人材育成プログラム、マーケティング調査、学生との交流などの活動を展開していきます。

百年記念会館にて執り行われた締結

式には、観光学高等研究センターの山村高淑センター長、木村 宏教授、一般社団法人ひがし北海道自然美への道DMOの上野洋司代表理事、野竹鉄蔵専務理事など関係者約20名が参加しました。

この協定締結により、それぞれが実施する観光人材育成プログラムへの講師の相互派遣、観光地域づくりに関する

マーケティング調査や共同研究の展開、大学院生の研究フィールドとしての地域の活用など、様々な効果が期待されます。

なお、道内の観光DMOとの連携協定締結は同センターにおいて初の試みとなります。

（観光学高等研究センター）



左から、木村教授、山村センター長、上野代表理事、野竹専務理事



連携協定締結の様子

脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙行

脳科学研究教育センターでは、4月7日（木）に本学エンレイソウ第1会議室において、今年度入学した履修生の開講式を行いました。

はじめに、田中真樹センター長（医学研究院教授）から、祝辞とともに発達脳科学専攻の特色ある教育体制や研究指導内容について説明があり、「所属学院・研究院の課程のみを修了する大学院生に比べ、より多くの単位を修得する必要があり、さらには当センタ

ーの合宿研修や発表会等で研鑽を積むことになり大変ではあるが、その経験は必ず将来の自信につながるので頑張っていたほしい」との激励がありました。

引き続き、出席した基幹教員と履修生の自己紹介の後、関あゆみセンター教務専門委員会委員長（教育学研究院教授）から、修了要件についての説明と履修に関するガイダンスがありました。今年度も新型コロナウイルスの感

染拡大防止のため、新入生歓迎交流会は中止となりましたが、参加者は所属大学院を超えて脳科学研究を学ぶ期待に胸を膨らませていました。

本専攻には、今年度8名の履修生（修士課程7名、博士後期課程1名）が加わり、全体では27名の履修生が在籍することになります。

（脳科学研究教育センター）



田中センター長より祝辞



感染症対策をしながらガイダンスを受ける履修生



新しく加わった履修生と基幹教員

■表敬訪問

海外

年月日	来訪者	来訪目的
4.4.20	鈴木貴子 外務副大臣	表敬訪問及びJICA研修員との意見交換



鈴木貴子 外務副大臣（中央）

（国際部国際連携課）

人事

令和4年5月1日付発令

新職名(発令事項)	氏名	旧職名(現職名)
【教授】 大学院メディア・コミュニケーション研究院教授 大学院メディア・コミュニケーション研究院教授 大学院工学研究院教授	金 ソンミン 土田 映子 山田 朋人	大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授 大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授 大学院工学研究院准教授

新任教授紹介

令和4年5月1日付



メディア・コミュニケーション
研究院教授に

キム
金 ソンミン 氏

メディア・コミュニケーション部門
国際地域文化論分野

生年月日

昭和51年2月28日

最終学歴

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 博士課程修了(平成25年7月)
博士(学際情報学)(東京大学)

専門分野

メディア・文化研究、音楽社会学



メディア・コミュニケーション
研究院教授に

つちだ えいこ
土田 映子 氏

メディア・コミュニケーション部門
多元文化教育論分野

生年月日

昭和44年10月20日

最終学歴

シカゴ大学大学院 社会科学研究科 教育学専攻 博士課程修了(平成26年3月)
Ph.D.(教育学)(シカゴ大学)

専門分野

アメリカ地域研究



工学研究院教授に

やまだ ともひと
山田 朋人 氏

土木工学部門
社会基盤マネジメント分野

生年月日

昭和53年7月11日

最終学歴

東京大学大学院工学系研究科博士後期課程修了(平成19年3月)
博士(工学)(東京大学)

専門分野

水工学、地球水循環システム

訃報

教授 ^{はまだ やすひろ} 濱田 靖弘 氏

(享年51歳)



工学部の現職教授であられた 濱田 靖弘 先生が令和4年3月28日にご逝去されました。

濱田先生は、平成5年3月に北海道大学工学部衛生工学科を卒業、同7年3月に同大学大学院工学研究科都市衛生工学専攻修士課程を修了、同年4月に同専攻博士課程に進学され、同年10月に本学工学部助手に任用されました。その後、平成11年6月に博士(工

学)を取得され、同15年10月に助教授、同25年4月に本学工学研究院空間性能システム部門(令和2年より環境工学部門)環境人間工学研究室の教授に昇任されました。

教育面では、「熱工学」、「人間環境計画学」等多数の科目を担当され、多くの博士・修士・卒業論文を指導されました。留学生や社会人博士を含めた卒業生が国内外で活躍されています。

研究面では、人間工学と熱工学の観点から生活環境の快適性と省エネルギーの両立、分散型エネルギーシステムなどの研究に取り組み、多数の論文を公表されました。特に、寒冷地特有の自然エネルギーである「雪氷冷熱利用」に関する産官学連携研究では、多くの成果と受賞の栄誉を称えられました。近年は「家庭用熱電併給システム」の寒冷地利用に関する産学連携に取り組み、将来の北海道における住環境設計やエネルギー利用の発展に貢

献されました。

学内においては、専攻長、部門長等を務められるとともに、本学及び工学部の運営に多大なる貢献をされました。学外では、空気調和・衛生工学会理事・北海道支部長、日本冷凍空調学会北海道地区事業推進委員会委員長の他、日本建築学会などに所属され、国土交通省PFI検討委員会副委員長などを務められました。

濱田先生は、穏やかで誰にでも敬意をもって対応される御人柄から人望も厚く、学生への指導も極めて熱心で、多くの優秀な卒業生を輩出されました。享年51歳という若さで現職のまま御逝去されたことは、先生にとってさぞかしご無念であったことと拝察いたします。先生の御貢献に改めて感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

名誉教授 ^{もちづき つねこ} 望月 恒子 氏

(享年68歳)



名誉教授 望月恒子 先生は、令和4年4月22日にご逝去されました。

望月先生は鹿児島県のご出身で、昭和51年3月に東京大学文学部ロシア語ロシア文学専攻課程をご卒業後、同年4月に東京大学大学院人文科学研究科修士課程(露語露文学専攻)に進学され、昭和53年3月に文学修士を取得、同年4月に同博士課程に進学され、昭和58年3月に単位取得退学されました。平成6年4月に北海道大学文学部

助教授として着任され、平成17年3月には北海道大学大学院文学研究科教授になられ、平成29年3月、定年でご退職されるまでロシア語、ロシア文学の教育、研究にご尽力されました。また、平成20年4月から同22年3月まで北海道大学大学院文学研究科長・文学部長、平成23年4月から同29年3月まで附属図書館副館長・北図書館長、平成26年4月から同29年3月まで北海道大学副学長をお務めになられ、文学研究科・文学部にとどまらず、大学全体の管理運営の重責を長年にわたって果たされました。

望月先生のご専門は、ロシア語、ロシア文学、特にチャーホフと、プーニンなど亡命ロシア文学を中心とする近現代ロシア文学で、多くの優れた研究業績を残されました。また、ロシア語、ロシア文学及びロシアの文化や歴史に関する学生の広範な関心に応えて、幅広い授業と綿密な論文指導を行われました。北大の特色ある研究分野

であるロシア語、ロシア文学研究から、多くの優秀な研究者が輩出しているのも、先生の重要なご貢献の一つと言えます。

無双の才学に加え、優れた実務能力をお持ちであられた望月先生は内外の絶大な信頼を集め、文字通り休む暇もなく重職をお務めになられました。その一方で「女性初の」という形容を伴って世の特別な注目を受けられることも少なくなく、そのためのご心労も多々おありになったのではないかと拝察されます。望月先生は、変化の激しい転換期にあたって、大学の新しいあり方を象徴するパイオニアとしての責務を十二分に果たされ、後の時代に対して非の打ち所のない「あるべき姿」を示していかれました。多大なご貢献にあらためて深く感謝申し上げますとともに、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(文学院・文学研究院・文学部)

名誉教授 おだじま あきら 小田島 晟 氏
(享年99歳)



名誉教授 小田島晟 先生におかれましては、令和4年4月11日、ご逝去されました。

先生は大正11年12月7日北海道に生まれ、昭和20年9月北海道大学理学部物理学科を卒業、引き続き同大学院特別研究生となり、昭和25年9月に同後期課程を修了しました。昭和27年7月

北海道大学応用電気研究所助教授に任じられ、昭和37年1月には北海道大学工学部工業数学講座教授に昇任し、昭和42年4月には同工学部応用物理学科応用数理物理学講座の初代教授として迎えられました。昭和61年3月定年により退職し、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。また、平成11年春には勲三等旭日中綬章を受章されています。

研究面では、わが国で核磁気共鳴の研究が始まった当初において、NMRスペクトロメータの試作に成功し、それを用いて高分子の分子運動の研究を行いました。これはNMRを高分子材料に用いた日本で最初の研究であり、特筆に値するものです。その後、米国ペンシルバニア州立大学に招かれ、客員教授としてこの分野での先駆的ないくつかの論文を発表しました。一方、

X線回析法によってポリエチレンの非晶状態について分子鎖内局所形態、分子鎖間局所配向相関を明らかにしました。その後高分子材料の機能性に関する研究に進み、分極動特性の解明、そしてさらに新しい相転移の理論を提唱しました。これらの業績に対して高分子学会から昭和57年度高分子科学功績賞が授与されています。

学外にあっては、学術審議会専門委員、日本学術振興会情報科学用有機材料第142委員会委員、及び応用物理学会、高分子学会、日本物理学会の理事、評議委員などを歴任し、わが国の学術振興に多大の貢献をされました。

ここに小田島先生の生前の多大なるご貢献に敬意を表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

名誉教授 しちのへ ちようせい 七戸 長生 氏
(享年91歳)



名誉教授 七戸長生 先生が、令和4年3月25日にご逝去されました。

七戸先生は、昭和5年9月25日に青森県上北郡三本木町(現・十和田市)にて、陸軍省軍馬補充部(当時)に獣医師として勤務されていたご尊父・理三郎様と、北海道日高・浦河町出身のご母堂・サク様の三男としてお生まれになりました。ご一家は、昭和10年に

ご尊父様が北海道農事試験場・北見分場(当時)の分場長となられたのを契機に訓子府町に移住され、その後、昭和15年に同じくご尊父様が北海道畜産組合傘下の上川畜産組合(現・上川生産農業協同組合連合会)の参事兼技師となられたため旭川市に転居しています。

七戸先生は地元の旭川中学校に進学された後、昭和23年に北大予科を受験して合格、昭和24年9月に農学部・農業経済学科に進み、昭和28年3月に卒業されました。大学院への進学後、農業経営学研究室の故・矢島 武先生に師事され、研究者への道が拓けていくことになりました。

その後の七戸先生のご経歴については詳細を省略せざるを得ませんが、農林省農業総合研究所(当時)を経て、昭和47年7月北海道大学農学部助教授、昭和58年4月に教授に昇任されて

います。平成6年3月に定年退官を迎え、北海道大学名誉教授の称号を授与されました。この間、平成元年4月から平成5年4月まで農学部長をつとめておられます。学界においては昭和63年日本農業経営学会会長、社会活動においても昭和63年北海道農業振興審議会部会長に就任されるなど、指導的立場でご活躍を続けられました。また、昭和63年に北海道大学図書刊行会(当時)から刊行されたテキスト『日本農業の経営問題』は、今も長く読み継がれています。

七戸先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、多大な貢献に感謝申し上げます。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(農学院・農学研究院・農学部)

名誉教授 ^{えづら よしお} 繪面 良男 氏
(享年85歳)



名誉教授 繪面良男 先生が4月15日にご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

繪面先生は栃木県にお生まれになり、昭和37年3月に北海道大学水産学部水産製造学科を卒業後、同大学大学院水産学研究科修士課程、同大学大学院水産科学研究科博士課程に進学された後、昭和41年10月北海道大学水産学部助手に採用されました。その後、昭和52年4月に同大学水産学部助教授、平成3年4月に同大学水産学部教授に昇任され、水産食品学科微生物学講座、後に水産海洋科学科生物海洋学講

座、平成12年4月からは大学院生命資源科学専攻応用生物科学講座を担当され、平成14年4月に北海道大学名誉教授になりました。

繪面先生は、一貫して海洋に棲息する細菌の研究に取り組み、海洋細菌の特性解明と分類体系の確立、さらに、わが国沿岸域における海洋微生物群集の生態学的研究に従事して幾多の業績を残されました。同氏の海洋細菌に関する研究は多岐にわたりますが、海洋細菌の特性に関しては、海水中の2価のイオンに着目し、海洋細菌は発育増殖にこれらの無機塩を要求するという特性を明らかにし、その成果を基に海洋細菌の分類体系を確立しました。先生が行った海洋細菌の特性とその分類に関する研究成果は、わが国をはじめ世界の海洋細菌研究の進展に大きく貢献する基礎を築くとともに、水棲生物と水棲細菌との共生・寄生関係を明らかにしたことで、水産生物と密接な関係を有する海洋微生物の研究を大きく進展させる原動力となりました。

学外においては、文部省学術審議会専門委員、北海道科学技術審議会委

員、北海道水産研究所運営会議委員を務められるなど、関連機関に対する指導を積極的に行ってこられた他、関連学会においても、日本水産学会の評議員・同北海道支部評議員や同学会理事などを歴任されるなど、水産学の発展に尽力されました。また、学内においては水産学部評議員、水産学部長・水産科学研究科長として大学運営に携わり、学部改革・大学院重点化の重責を果たし、また研究調査船うしお丸の練習船への昇格、北方生物圏フィールド科学センターの整備等、水産科学研究科・水産学部の発展に尽力されました。

このように、繪面先生は長年にわたって学術研究の発展、教育の推進、優れた人材の養成、大学及び学部・研究科の運営に多大な貢献をなされ、そのご功績は誠に大きなものです。先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)

名誉教授 ^{とみた きない} 富田 喜内 氏
(享年97歳)



名誉教授 富田喜内 先生が令和4年4月28日にご逝去されました。

富田先生は、昭和22年3月に東京医学歯学専門学校歯学科をご卒業され、昭和24年に東京医科歯科大学歯学部助手に採用されました。その後、昭和40年に北海道大学医学部助教授に昇任され、昭和42年に北海道大学歯学部の新

設に伴い同学部教授として口腔外科学講座、ついで昭和49年に口腔外科学第一講座を担当されました。昭和60年4月に北海道大学を退官され、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されました。先生は、東京医科歯科大学に16年余、ついで北海道大学医学部及び歯学部にて20年間、計36年余の永きにわたり口腔外科学の分野において数多くの研究成果を残すとともに幾多の優秀な人材を育成されました。

研究面においては口腔癌の診断と治療、唾液腺の基礎的臨床的研究そして口蓋裂の発生病理など多岐にわたる口腔疾患に関して多数の業績をあげられました。北海道における歯学教育の黎明期に遂行されたこれらの研究は、歯科医療の発展と向上並びに口腔外科の普及の基礎となりました。

さらに、昭和42年から14年にわた

り、北海道大学歯学部附属病院院長、北海道大学歯学部長、北海道大学評議員といった要職を歴任し、部局並びに大学の運営管理に貢献されました。

本学退官後は、東日本学園大学(現、北海道医療大学)歯学部長及び同学長、日本私立歯科大学協会副会長等を務められ、永年の歯学教育の功績に対して平成10年日本歯科医学会会長賞を授与されました。学会活動としては、日本口腔科学会会長、日本口腔外科学会理事、日本口蓋裂学会評議員等を歴任され、口腔外科学関連学会の発展に多大な貢献をされました。

ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(歯学院・歯学研究院・歯学部)

編集メモ

- 本学がTHEインパクトランキングのSDG2の項目で世界1位、総合で世界10位となったことを記念して、5月12日（木）から5月30日（月）まで、THEランキング仕様の構内循環バスが運行しています。また、5月12日（木）



THEランキング仕様の構内循環バス

- 昨年12月に学内通知にてお知らせしていたとおり、北大時報は6月号から完全電子化し、紙媒体の発行は本号が最後となります。電子媒体は右記より閲覧できますので、6月号以降も北大時報をどうぞよろしくお願いま

から学术交流会館付近と学生交流ステーションに、THEランキングの横断幕が設置されています。こちらは秋口まで設置しておりますので、ぜひ足を運んで現物をご覧ください。



横断幕設置の様子

す。
(掲載先) ホーム>広報誌>学内向け広報誌「北大時報」
<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>

裏表紙メモ

今月のキャンパス風景はサクシュコトニ川です。色々な生きものが住んでいるこの川に、この日はオンドリが来ていました。オレンジ色をしたオスたちが、メスを追いかけてあっちこっちと忙しそう。緑あふれるキャンパスを、動物たちも満喫しているようです。

キャンパス風景 26 サクシュコトニ川 (北9条西6丁目)



北大時報 ⑤ No.818 令和4年5月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL: (011) 706-2610 / FAX: (011) 706-2092 / E-mail: kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>